



“弁当の日”は、2001年香川県滝宮小学校校長だった竹下和男先生が親子の時間と絆を取り戻すために始められた取組です。竹下さんが目指したものは、子どもたちの家庭や人生がよりよくなるための土台を築くことでした。竹下さんが弁当の日に込めた『6つの夢』を紹介します。

“弁当の日”に込めた6つの夢

① 一家だんらんの食事が当たり前になる夢

子ども自身が弁当を作ることで、家庭の台所や食卓での親子の触れ合いが生まれ、一家だんらんの食事の基礎となる。

② 食べ物の『命』をイメージできるようになる夢

人間は、動植物を卵や種で食べたり、成長した状態で食べたりする。食材に接しながらその一生を想像できるようになれば、『食べることは生きる力をいただくこと』と気付く。

③ 子どもたちの感性が磨かれる夢

子どもたちは生活体験が乏しい。弁当作りで五感が刺激される。一升瓶のしょうゆをしょうゆ差しにうまく入れること一つとっても、感性を刺激する体験にあふれている。

④ 人に喜ばれることを快く思うようになる夢

子どもたちが家族の弁当や食事を作ったとき、家族がその意欲を思い切り褒めれば、人のために仕事をする喜びを知る。

⑤ 感謝の気持ちで物事を受け止められるようになる夢

献立、買い出し、調理の大変さを実感すれば、生産者の苦勞に思い至る。感謝の気持ちで周囲を見ることにつながる。

⑥ 世界を確かな目で見つめるようになる夢

食品への関心が高まり、「なぜ市販品の弁当は安いのか」など疑問がわけば、社会の仕組み、よりよい社会にするための方策は・・・など、問題意識につなぐことができる。